



TITLE:

WANG DAHONG'S IDEA  
OF“CHINESENESS”IN  
ARCHITECTURE DESIGN(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

Ko, Sheng Chieh

---

CITATION:

Ko, Sheng Chieh. WANG DAHONG'S IDEA OF“CHINESENESS”IN  
ARCHITECTURE DESIGN. 京都大学, 2017, 博士(工学)

ISSUE DATE:

2017-09-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20698>

RIGHT:

京都大学	博士（ 工学 ）	氏名	郭 聖 傑
論文題目	WANG DAHONG'S IDEA OF “CHINESENESS” IN ARCHITECTURE DESIGN （王大閔の建築設計における「中国性」の観念）		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は戦後台湾建築を牽引した王大閔（Wang Dahong, 1917-）の建築設計と建築思想に注目し、その中心的課題とされた「中国性」の内実を明らかにすることによって、戦後台湾における近代建築受容の萌芽期の一端を明らかにした研究である。これまで王の建築作品における「中国性」については、政治的イデオロギーを背景にその建築形態が表面的に論じられてきたのに対し、本論文では、王が伝統的中国建築の空間性を再解釈し思想的にも深化させたことを精緻に証示している。</p> <p>第1章では、専門諸領域で使用されている「中国性」という概念を瞥見している。政治社会研究では、「中国性」は政権の正当性や儒家文化との関連から論じられているのに対し、民族文化研究や都市史研究の領域ではその多様性が論じられていることが確認されている。その上で、王が主題とした「中国性」はこれらとは異なる内省的な建築的観念であり、王の建築制作を理解するうえで鍵となる重要な視点であることを指摘している。これを踏まえて、王の「中国性」をその言説と建築作品から解明することを研究目的に設定し、研究方法と論文構成を示している。</p> <p>第2章では、王の生涯について、既出の資料に加えて新たな個人資料を入手して調査している。その結果、王は中国で生まれたあと、青少年期を欧州で過ごして米国で建築を学び、西洋の近代思想や近代建築を深く学んだこと、その後、台湾に定住すると、文化大革命に対抗した中華文化復興運動のなかで重要な国家的施設を含む多数の建築作品を設計したこと、またオスカー・ワイルドなどのロマン主義文学に強い関心を示し、その翻訳にとどまらず、自ら文学作品を制作したことを示している。</p> <p>第3章では、王の言説を網羅的に分析し、語られた主題を〈原理〉〈時代認識〉〈設計アイディア〉に整理し、その相互関係を考察している。その結果、新たな〈アイデンティティの創造〉の必要性が中心的な主題のひとつとされていること、そしてそのアイデンティティが〈両義性〉という原理と、〈シンプリシティ〉という観念に求められていることを明らかにし、こうして王が中国建築の伝統の模倣を拒否し、新たなアイデンティティとしての「中国性」を探求していることを明らかにしている。</p> <p>第4章では、王の言説のなかでとくに伝統的中国建築に関する記述に着目し、分析を行っている。王は中国の伝統的建築全般について、建築と園林による内外の融合など一般的な特質を指摘する一方、幼少期の蘇州住宅に関する個人的な記憶を表明している。本章ではとくにこの王の個人的記憶に注目し、王の発言内容を蘇州住宅の空間構成と照合し、とりわけ天井（中庭）・備弄（側廊）・後院（裏庭）などの場所について、神秘的でロマン的な奥深さの印象が語られていることを指摘している。</p>			

京都大学	博士（工学）	氏名	郭 聖 傑
<p>第5章では、自邸を中心に5つの住宅作品を分析している。初期のコートハウス計画では蘇州住宅に特徴的な中庭を挟んだ〈進（ジン）〉の構成がそのまま踏襲され、水平的な奥行きが追求された。しかし〈進〉の構成はすぐに崩れ始め、1955年の羅邸を転換点に、60年代以降のタウンハウスでは〈進〉に代わって3間構成があらわれる。こうして、部屋を中心に強調した求心的で内奥性の強い空間の追求へと移り変わっていった。これらの点を明らかにしている。</p> <p>第6章では、王の代表的な計画である故宮博物館案（1961）と孫文記念館（1965）の二つの国家プロジェクトを考察している。設計コンペティションの最優秀案となった故宮博物館案は、当時称揚された中国宮殿式のような伝統的形態の直裁な踏襲を拒否したものであることで知られているが、本章ではこの計画案を蘇州住宅の空間構成と比較し、伝統的形態の継承に代わり、〈進〉と3間構成という空間構成の適用が試みられていることを指摘している。また、孫文記念館は伝統建築と近代建築の折衷様式と評価されているのに対して、その平面構成を3間構成と捉えうること、中央のホールは〈内四界〉として解釈され、その中心性と垂直性が追求されたことを指摘している。</p> <p>第7章では、王がもっとも純粋に「中国性」を表現しえたと考えるセレーネ・プロジェクトについて、収集した記録文書と設計図を利用して、その設計過程を分析している。中空の単純なこの塔状モニュメント計画案の設計過程は、一見すると大きな変化が見られない。しかし、記録文書と設計図を時系列に沿って詳細に分析することによって、内部空間の垂直的奥深さが追求されたことを証示している。また、当初は台米関係の象徴という政治的文脈のなかで計画が開始されたものの、次第に宗教的で神秘的な空間として建築的純粋性が探究されるようになったこと、さらには、二つの部分によって一つの塔が構成されるという二元論が重ね合わされ、思想的な深化も図られたことを指摘している。</p> <p>第8章では、以上の言説分析と作品分析の成果について、空間構成、空間の質、設計思想の観点から総合的に考察し、王が探究した「中国性」の内実として、次の結論を得ている。1）王は伝統的建築とくに蘇州住宅の空間構成に強い関心を示し、初期には〈進〉の構成を試みたが、次第に3間構成へと移り、内四界の再解釈へと至ったこと。2）それに伴い、初期の水平の構成的奥行きの追求から、垂直的非構成的奥深さの探究へと深化したこと。3）進の構成による内／外の対立的二元論から、セレーネ・プロジェクトで思考されたように、同じ二つのものが一を成す二元論へと推移したこと。</p> <p>第9章では、本論文で得られた成果について要約し、台湾近代建築史研究における研究成果の意義を示している。また、今後の研究課題として、作家研究から建築思潮研究への展開を挙げている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、戦後の台湾で活躍した中国人建築家王大閔の言説と建築作品の分析を通して、王が探究した「中国性」の内実を解明している。王は台湾における近代建築の第一人者であるため、これまで多くの評論が著されているが、記録文書や設計図面などの資料を徹底的に収集し、それらの精緻な分析を通してその作品の意義を考察した学術研究としては初めてのものである。得られた主な成果は次のとおりである。

1. 王にとって、建築の「中国性」の源泉に蘇州住宅があることを指摘した。王は青年期にヨーロッパに留学し、米国で近代建築を学んで西洋文化に深く触れていたが、幼少期に居住した蘇州住宅をのちに回顧していることに注目し、王が神秘的でロマン的と形容し、鮮明な記憶を表明した蘇州住宅の空間体験こそ、王が追求した建築の中国性の原点となっていることを明らかにした。

2. 王の建築作品に表された「中国性」は、構成から空間へ移り変わっていったことを明らかにした。王の初期の作品には蘇州住宅の〈進〉の構成が見られ、水平的で構成的な奥行きが追求されていた。しかし、次第に3間構成へと移り変わり、さらに3間構成の中心部である〈内四界〉の強調へと進んでいった。この最終段階については、これまでほとんど言及されることのなかったセレーネ・プロジェクトを取り上げて明らかにしており、その詳細な設計過程の分析を通して、垂直的で計量できない非構成的奥深さの探究へと到達したことを示している。

3. 王が追求した建築空間の「中国性」は二元論の思想にも繋がることを指摘した。水平的で構成的な奥行きから、垂直的で非構成的な奥深さへの探究の過程は、内／外、明／暗といった二項対立的二元論から、二つの同じものによる一つのものという二元論へと深められて行ったことを明らかにしている。

以上のように、本論文は、これまで台湾に近代建築を導入しつつ、中国性と融合させようとした折衷的建築家として評価されてきた王大閔について、その言説と建築作品を詳細に分析することによって、王が追求した「中国性」の核心を新たに提示したものであり、学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平29年8月17日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期過程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。